日本語教科書における外来語成分を含む混種語の調査分析

―日本・台湾・韓国の教材を中心に―（要旨）

林　慧君

語彙力は言語能力を計る一つの目処としてよく立てられるが、語形、語構成の観点からのアプローチは語彙力をアップさせるに役立つと考えられる。例えば、「ソフト」という外来語に関する教育は、それ自身が語になる以外に、他に「ソフトウエア」「ゲーム・ソフト」といった、「ソフト」が前項・後項要素に位置する複合語、更に「日本語入力ソフト」といった、「ソフト」を含む混種語も効率的に覚えていけることにつながる。

本研究は日本語教科書における外来語成分を含む混種語の調査研究であるが、その対象とする教科書としては、日本で編纂されたものを軸に据え、台湾人向けのものと韓国人向けのものとを追加し比較する。具体的には、まず、三ヶ国の初・中・上級の教科書をそれぞれ 2～3 冊ずつ選び、その中の混種語を考察の対象に取り上げ、縦断的に語彙の実態調査を行い、三ヶ国の教科書に出現する混種語を比較する。次に、語構成的な性質の論述を通して日本語教科書の混種語における構成要素の特徴などを分析する。更に、日本語学習者に対する混種語の語彙学習への可能性を探ってみる。

結論として、まず、三ヶ国共通の混種語は僅か 16 語(2%)しか抽出できず、意外と少なかった。日本の教科書に出現する混種語が最も多いが、台湾と韓国の教科書における初・中級の段階における混種語の導入状況が反対になっているとわかった。構成要素で見ると、一つの外来語語基による複数の混種語の造語例は、日本語の教科書には割と採用されているのに対し、台湾と韓国の教科書ではもう少し積極的に導入する必要があるように思われる。他に、外国の国名がよく混種語の造語に用いられるのが外国人向けの日本語教科書の特徴の一つだと解明した。その外国名の外来語語基に漢語の一字接尾辞的要素や和語接尾辞的要素を抑えておくと、混種語の語彙力アップに役立つとも明らかになった。